

六年目

二月

寮母になつて丸五年が過ぎた。五十の坂を越えてからの就職だから、いやでも後がない、というのもあるけれど、私にしてはよく投げ出さないでやってきたなあとと思う。五年間のうち休んだのは八十五日。普通のお勤めの一年分にも足りない日数で、これはきつかった。

寮生に対する気持ちは大分變つてゐる。はじめは娘のいない私には珍しくもあり、娘達の言動を楽しみ、優しく接していたが、親の立場になつてみれば、男と深く付き合つては次々と相手を変える娘はいやだし、責任を果たさず、自分だけに甘くて横着で、これでは社会で女はだめだと言われても仕方がない、と同性として残念なこともあるし、かつての自分の娘心を思い出しても役に立たない。今や失望と苛立ちと諦めのごちゃまぜの中にいる。

会社は「結婚しても困らぬようにしつけてやってください」と言うけれど、しつけ

が要るのはいくら言っても聞かず、はじめからよくできているのは、向こうから「料理を教えて」などと言つて来て、何も言うことはない。ただしこんなのはごく僅かであり、大抵は、こんなので大丈夫かな、と思いながら送り出してしまわなければならない。

私は前の寮母さんのやり方を白い目で見て、決してあんなにはならないでおこう、と思つていたけれど、この頃段々彼女の気持ち判つてきた。彼女も私のやり方を否定していたから、今判つた、と言えどどんな顔をするだろうか。

これから、止むを得ない軌道修正はして、そして自分の心身を守ることに重きを置いて、規休以外にも大きな顔して休もう、と思つてゐる。

○日

門限破りの常習者がいる。遅れるという連絡もしないから、一度に二回の罰がつく。その罰の日をボードに書き並べ、済んだら／で消してまた日を書き加えるから余白がなくなつてしまふ。済めば拭き消せばよいではないか。私には楽しんでゐるのかとさえ思えるので「どういうつもり？ 恥をさらして面白いの？ とにかく、寮に限りは規則を守りなさいよ」と言つた。でもまだ遅れは続く。次は「あなたには寮にい

るのなら規則を守れという言い方では分らないようね。規則を守れないのなら寮を出なさいということよ」と言つた。それでようやくましになった。

このことを寮長が「彼女なりに努力しているようですから」と言いに来た。かばっているつもりか？ 彼女なりにとはどういうことよ。この寮長も自分で「なりたい」と言つてなつたくせに、寮長らしいことは何もしない。いつも私が催促してから事を始めるのだ。これもあるから私はムツとして「何でも言われなければできないのは情けないじゃないの」と両方にかけて言つたのだけれど、寮長は「ほんとにそうですねえ」と他人事のような顔をしている。蛙のつらに水、というところ。「あなたもよ」とはつきり言わないと分からないらしい。

私は、後味が悪いから面と向かつて怒らなかつたけれど、いらいらしている方が神経に悪いから、今年から方針を変えて怒ることにした。といつて、まだ怒鳴ることはできない。でも見ていなさい。そのうち怒鳴りまくつてやるから。

三月

月末に新社員が十四人入寮することになった。そのうち何人かは研修が終れば東京に行くけれど、寮生が倍增することは確かである。去年の試験時に泊まりに来なかったから、もう増えないのかと思っていたら、いきなり十四人と言われてびっくりしてしまった。

かつて二十五人の時もあったから、炊事などはやれないことはないけれど、生活上の指導は、在寮生にしっかりしたのがないから孤軍奮闘となるだろう。今までとやり方を変えて、ここは一つこわもてでいかねばならない。と、弱気を押しこんで待っている。

○日

石橋に「個人レッスンはしない、コンクールには出ない、お揃いのドレスは着ない、

三か月で顔つきが変る」のキャッチフレーズを持つコーラス団があるのを知った。

心ならずも閉じこもって「無言の行」に近いことをやっているせいで顔つきの悪くなった私には、ぴったりのところではないか。そこに行けば外気を吸えて、声も出せて、その上顔つきもよくなれば言うことはない、のであるけれども、それには一か所、大きな関所を越えなければならぬ。

社内の異動は終わってしまった。異動の季節が来る度に、こちこちの上司殿が栄転になるのを、ひたすら願っているのだけれど、今度もまた泡と消えた。大きな関所とはこのところ。

人をよく働かそうと思えば、適当に遊ばせるのも必要ではないだろうか。特に私のような、休んだあくる日には「さあ働こう」と思う単純な人間には効果的なのに、解っていない。

五年の間、機会があれば言って、最近ようやく「会社に電話をかけてから」の条件つき外出許可を得た。だから、電話をかけて歌いに行けばよい、と言われるかも知れないが、二十日に一度の休みで、夜も仕事がある職場では、その間に適当な息抜きが必要なことを、根本から解ってもらいたいのだ。

ここで笑ってしまった。元亭主に対して、私は別の意味だけれど、「人権を認め

よ」と旗を振っていたのだった。どうしてこう拘束される所に縁があるのだろうか。そしてしつこく抵抗している。

元亭の所は無理やり抜け出した。しかしここは抜け出すわけにはいかないし、話合いをしたい。果たして成るか、この難関突破。

○日

本が山ほど積んである。つん読の趣味はないけれど、月刊の小説誌は前のを読み終つてなくても、買っておかないとなくなるし、本屋をのぞいたら何か買ってしまうから増えるばかり。貧血になると寝てしまうのが原因でもある。

積んだ本を見て、前ならまだあれだけ読むものがある、と豊かな気持ちになったのに、この頃は追われる気分で、つん読となった。それなら急いで買わなくてもいい本は山が崩れてから買えばよいものを、つい手を出してしまう。

布地と陶器を売る店を私は毒屋と言っているけれど、本屋も毒屋となりつつあり、当分近づかない方がよさそうだ。

四月

○日

恒例の「ほのぼのキャンペーン」を一月に提出した。それがいつもならもっと早く結果が判るのに、今年は忘れた頃に返って来た。一次審査を通過して二次まで行ったからであつた。

私の提案は「古着でカーテンを」の題で、デザインが変つたために破棄される女子社員のユニフォームを、寮のカーテンに更生したいからいただけなのか、というものである。すでに寮生からもらつたもので一枚作っていたから、写真に撮り、布地見本をつけて出した。

しかしこれには、元のカーテンがもう朽ちているから「新調してほしい」と機会がある度に言っているのに叶えられない不満と皮肉をこめたつもりだったのに、私の書き方は優し過ぎたのか。審査員はその含みを見逃がし、単純に「いい提案です」とほ

めて、本店では一番の六十五点、採用、賞金千円となった。書類だけでなく、電話もかかって来た。横書きが苦手なのでワープロで打ったのも話題となった。

でもそんな目的はずれたところで感心してもらったら困るんだけだな。そしてほんとに「カーテン用にどうぞ」とユニフォームが山ほど届いたらどうしよう。入口にぶら下げるのだけで五着分の両身頃、両袖の二十枚を接ぎ合わせた。窓用となると何着分いることやら。部屋は十八ある。

○日

新入社員が大挙入寮して、覚悟はしていたものの、仕事は二倍以上となり、氣を使うこともあつてもうくたきただ。人間が来る前に荷物が届き、寮を見に来る親があり、それもいつ、と決まっていけないから、ひたすら待つ日々があつた。そして研修中は食事を作つてやりたいから、と休まなかったら、食欲がなくなり熱が出た。もうこの頃は鬼の霍乱などとは言えない。ためがなくすぐプツンと切れる、もろいことこの上なし。

○日

高卒の五人が研修を終え、九州、北陸などそれぞれの任地に帰ったので一息つく。まだ九人残っているが、一日休み、友人の歌う、サリエリのレクイエムを聴きに行った。サリエリはモーツアルトの陰にかくれて有名にならず不運な人であるが、ベートーベン、シューベルト、リストの先生であり、ハイドンとは友人だったとのこと。音楽も素晴らしかった。私はモーツアルトのレクイエムは聴き過ぎたからか、サリエリの方が荘厳に聴こえた。

でも待望の外出だけれど、お行儀の悪い人間の多さにへきえきして、後に続く別の演奏会は放棄して帰って来てしまった。これは私の神経のせいだけではない。聴衆のマナーが悪い。第一、昼の音楽会に遅れて来る人がいる。それを途中で入場させるから、演奏が中断される。れっきとしたシンフォニーホールである。昔は、遅れたら一曲終るまで入れなかったはずだ。途中で入れる癖をつけるから、平気で遅れて来るのではないだろうか。ホール側に文句を言いたかったけれど、その元気はない。私は生演奏の、ホールの雰囲気が好きだったけれども、もうオーデイオで聴く方がいいのかも、と、ふと思つた。

去年の春に仙台へ帰った元寮生のワダさんから電話がかかった。いきなり「おばさん、お金持ちよね」ときた。

私「お金持ちなら、おばさんはやってません！」

ワ「またア。とにかくワダのお願い聞いてほしい」（この子は自分のことを名字で言う）

私「何か知らんけど、お金のいることなんやね」

ワ「それと十月九日十日はワダのためにとっておいてねっ。ねっ」

私「十月に何があるの。結論をはよ言いなさいよ」

ワ「へへ。ワダは結婚します」

私「えっ、結婚で……相手は男やろね。今日はエイプリルフルではないし……」

私は驚きのあまり、つい言ってしまった。彼女は男の子のような女の子で、というより今の男より男らしい子なのであるから。それが結婚、それも恋愛結婚だと。これは何が何でも相手の男の顔を見なければならぬ。

しかし、結婚披露宴は、私は別れているから招かれざる客であり、もともと白々しくていやだから出席する気は全くない。この間も元寮生の披露宴への招待と、スピーチをお願いしますと言われて、私は招待に対するお礼と、お断りと、別にスピーチ用の手紙をお祝いと一緒に送って、堪忍してもらったところであつた。

ワダさんは「おばさんが別れていようと関係ない。来てもらわないとワダが困るのだから」と食い下がる。お母さんも電話口に出られて「是非」と言われた。そして彼女は「結婚後は東京に住むけれど、二人の生まれ故郷が北海道だから、式も披露宴も札幌にする、だからおばさんも札幌に来て」と言う。

「二人の」だなんて、どんな顔して言ってるのかと思って私は笑ってしまった。とにかくその「二人」を並べて見てみたい。男は熊のような人か、でなかったら、ワダが尻に敷いたらつぶれそうな人か、どっちだろう。

でも案外彼女は普通の女の子になっているのかも知れない。寮では、私が部屋をノックしたら、寮生だと思って「おう！ 入れよ」なんて言っていたのだけだ。

五月

○日

今年の新入社員で研修の間来ていた東京の大学卒業生はひどかった。生活の基本的なことが全くできない。五人揃ってである。言っても効き目はなく、言い疲れてもう後始末は在寮生が私が出した。

寮の食事は毎日全員欠食である。こんな貧しいものは食えるか、というところだろう。入寮した日に寮則を渡し「出る時は返してね」と言ったのに、五人中四人は返さない。どこに入ってるか判らないから後で送るとのことであつた。読んだのかどうかも怪しい。部屋の鍵も見つからないのが一人いた。

先に研修を終えた高卒生は鍵も寮則も返し、きちんと挨拶をして帰って行つた。大卒生がもしも「お世話になりました」とでも言えば、私は「食事もしなかつたし、何もお世話はしていませんよ」と皮肉を言つてやろうかしらと思つていたけれど、彼

女達は「時間がない」とバタバタと出て行ってしまった。私は口あんぐり。口もしまらぬまま、残した荷物を送り、部屋を片付けた。ゴミも置いたままであった。

在寮生も「何やのん、あの人達は」と怒っていたし、会社でも評判はよくなかったようだ。本店のO氏から電話がかかり「今年の大卒の新入生に対して何か言いたいことありますか」と言われた。彼女達が出したレポートには「寮生活は門限はあるし、掃除当番はあるしつまらない。東京組は東京で研修をやったらどうか、そうしたら自宅から通えるのに」と書いてあったそうである。私はよくぞ聞いてくださいましたとばかりみんな話し「高卒より質は落ちます。東京の子はあんなのか、大学に行ったところがマイナスか、とにかくあのままでは社会へは出られないでしょう」と言つてようやく口を閉じた。それでも寮則と鍵のことは、O氏が「東京本社を通じて返すようにしましう」と言われたけれど「彼女達が送りますと言ったのだから、それを信じてもう少し待つてみます」と断った。

しかし一か月経つても送つて来ない。もう自発的に返す気はないらしい。鍵はないと困る。O氏に「ご手配をお願いします」と頼んだ。

四年間、何を学んだのだろう。恥をかくことだけを覚えたのか。プライドがあるのなら、かえって批判されないようにするべき、と私は思うけれど。男女雇用機会均等

法が施行され、折角差別がなくなりかけているのだから「しっかりしてよ」と言いたい。そして「さすが大卒だけのことはある」と言わせてよ。

○日

久しぶりに碁会のお誘いがかかった。メンバーの中の、ご両親が亡くなられて猫だけが住んでいる家ですとのこと、碁会所でもないし気は楽である。それはよいとして「お茶くみしてな」と言うから、私はむかつて「そんなものせえへんよ」と二回も念押しをした。

しかし女性陣は欠席の様子、とすればやっぱりなあ。それに「してな」と言われたら「いやや」と言うけれど、するに決まっている。それならいつそ先手を取り、からめ手でいけば殺される（碁盤上で）こともないかも知れない。口で負かそうと勝ちは勝ちであるから優しくして、胃袋もねらってみるか。

おにぎりの山と焼豚茹で卵をモチーフに、バックの色は野菜でつけたお弁当を用意した。これでそんなに働かなくてもすむだろう。

六人の男達はお酒はしっかりとご持参で、呑む打つを同時にやっていた。私は「カモが来たよ、ネギしょって」と自分から言う。「よう来てくれたなあ」は「よく食べ

物を持って来てくれたなあ」だと解釈する。

からめ手という手筋は碁にはなかったらしくて、ほんとにカモとなり、私は散歩に出た。判らずに来たけれど、どうやら我が母校に近いらしいのだ。でも町は変り果てていて長年通った学校なのに人に尋ねながら行く。

たどり着いた母校は、四十年前に私達が土を運んだ築山と、玄関はそのまま残っていた。懐かしさと年をとり過ぎた悲しさがわいて、しばらく立っていた。

家に帰って指導碁を打ってもらい、コーラス仲間にかえって歌を歌い、変化に富んだ一日は終った。

六月

○日

最近、欠食する寮生が多過ぎる。給料前には食べるが、お金が入ったらとたんにはほとんどが欠食する。ただし卵料理や洋風肉料理の時は別である。つまり好ききらいがあつて、お金のない時は我慢して食べるのだ。私は料理だけは手を抜いていないつもりだから気が悪い。そして給食屋の関係で三人以下はできないというのも、断るのはいつも同じ顔ぶれになるから氣の毒である。二十五人は多いけれど、十三人分なら私にとつて文句なしの許容量であるから、さあござれ、と思つてゐるのに、欠食のサインがずらりと並んでいるのを見ると拍子抜けがする。

そこで、メニュー表の下に「好ききらいを言わず、栄養のバランスのとれた寮の食事をして、健康な体になろう!」と書いた。

以前にも似たようなことをしたし、効果はあんまり期待していなかったが、いつも

なら張り出すなり乱暴な字がすぐ並ぶのに、この週の欠食サインは締め切り間際になつてからで、少し減り、字も小さかった。ちよつとは私の気持ちを察したか。いやいやそんなしおらしいタマ達ではない。でも、まあよし、とした。私は単純で、ほんとに甘い。

○日

寮生二人と京都に東山魁夷展を観に行つた。十年目のN子と新入生のM子二人が京都へ行くのは知っていた。鳥取から来たM子は、京都は修学旅行の時だけ、と言つたから「Nさんに案内してもらつたらいいわ」と言っていたが、出かける間際にN子が「魁夷展に行くけど、おばさんも行きませんか？」と言つた。私は「え、あ、そう、それなら」で、仕度もそこそこに抜けて出た。

会社には「私用で二、三時間外出します」と電話をかけた。三時間で帰れるはずはないけれど、一応知らせておけば後ろめたさを感じなくてすむという、神経のための形だけの手続きである。

N子が、京阪特急の隅の席を四人掛けにして確保したのは、お菓子を食べ、ジュースを飲むためであつた。まるで子供の遠足気分である。私にもすすめてくれたが、私

は電車の中で物を食べることはできないから見ていた。しかし、横を見たらまだうわてがいた。男女二人連れがお弁当を食べているのであった。

N子とM子は「お腹がふくれたら眠くなつた」と言つて眠つてしまった。私は眠ることもできない。二人の寝顔を見ながらつらつらと考える。今はもうこれが普通で、私が古いのか、といつて、私でも旅行に出たら駅弁は食べるのだから、近郊の電車内というのにこだわっているだけかも知れない。そして二人は、帰りの電車の中でも眠っていたが、疲労をいやし、上手な生き方をしているとも言える。私は気休めの電話を会社にかけて、私もタフになつたもんだ、と思つていたが、神経を張りつめた生活をして体をいためている。もう少し緩める必要があるのではないだろうか。

さて、東山魁夷の絵はどれも素晴らしくて、という陳腐な言葉では不本意だけれど、どう言えばよいかわからない。見るなり涙の出そうなのがあつて、画題を見たら「郷愁」。解説を読むと、魁夷の心の中にあるふるさとのイメージとのことであつたが、私はこの景色を知っている。昔歩いた信州の中にあつた。しかし図録によると六年前の展覧会にも出品されていたそうだけれど、私の記憶に残っていない。これはどういうわけか。

例によつて、へ理屈をひつつけて納得した。この景色は、昔の思い出ではなくて、

あの世へ行く時の景色なのだ。川もあることだし、遠い昔の思い出よりも、近い未来の方が強いから、それで懐かしい気がするのだろうと。

それはともかくとして、どれも、仕事を頭の隅に置いて見る絵ではなかった。もう一度きちんと休みをとって観に来よう、と楽しみを預けて帰って来た。

十日後に美術館に預けた物を取りに行き、ついでに、地下鉄が南へ伸びたから、行くのに便利になった城南宮（鳥羽離宮）の「源氏物語の花の庭」を観てきた。ここは「曲水の宴」が行われる所で、庭にはきれいな遣り水が流れていた。今の季節は花が少なくて、ここにまた別の物を置いてくることになった。

○日

草取りを兼ねてドクダミを採集する。去年は外壁のペンキ塗りで取っていなかった。今年、と花の咲くのを待っていた。おとしは五百本あったから、今年はこれなら千本はあるだろうと見当をつけた。

腰をいたわりつつ、日光を避けて、で二日かかる。千八十本あった。私の勘もまんざらではない、と、しょうもないことで嬉しい。

ドクダミの花は、日本では見向きされないが、ヨーロッパでは教会に植えられ、十字架の花として観賞されるそうである。見れば可愛い花だけれど、あの匂いはいただけない。でもきつと、あれほどのことなら深い意味があるに違いない。いつか、雑草の先生に聞いてみよう。

しかしいやな匂いは一日干せばなくなり、いい香りがしてくる。干すのに、日陰を求めて出したり入れたりするのがめんどくさくなつたので、大体乾いたところで、切つてポリ袋に乾燥剤と一緒に入れた。

これが、意外とドラ息子のお熱冷ましに効くのである。他に、飲ませたらシャンとする薬草はないだろうか。そしたら大汗かいても取りに行くのだけれど。

七月

○日

とうとう、クスノキは切られた。私の「切らなくてすむ最善案」提出の効き目なく、残念至極。

会社はこの際、近所迷惑の木々をなくし、駐車場にすれば一石二鳥だと考えたらしい。掃除をまめにやっていたら（といっても私の手を離れて、社宅住人の責任であるけれど）会社もそんな気を起こさなかっただろうから心が残る。

これに関していろいろあった。私は、クスノキのことばかり考えていて、駐車場にすると聞いても、駐車場になるのか、で申し訳ないだったけれども、寮生が三人、三人とも同じことを聞いた。曰く「駐車場にして、貸して、儲けるの？」と。私はとにかくが回らなかった。なるほどなあ。まだ工事中で、何台入るのか判らないけれど、社宅用ではなさそうだ。

駐車場になると聞いて、お金と結びつける寮生がハシコイのか、それが普通で私がトロクサイのか、どっちにしろ両方に感心してしまった。

それと、近所の人から電話がかかった。曰く「駐車場にするそうだけれど、塀を取って見通しをよくしないと事故が起きますよ。家を建て替えるときなどは、元の場所より引っこめるのが常識なのだから、カーブしている塀を真つすぐにしなさい。木を切っているから、たたりで人身事故になりますよ」。

うるさいな、もう。木があればあったで文句を言い、切ったら切ったでまたイチヤモン。それも会社や工事場横の住宅に言わず、寮に言ってくるなんて。私にしたら、泣きつらに蜂、である。私やもう知りません。

○日

「結婚式に来てね、来てくれないとワダが困るのだから」と言っていたワダさんが電話で「結婚式はキャンセルした」と言ってきた。変りないような声だったので私は「も早捨てられたのか」と冗談を言ったけれど、のってこない。わけを聞けば、お母さんが腫瘍の手術をすることになったそうで、予後を見てからになったらしい。今はお勤めも辞めて看病のため病院通いをしているとのことであった。元氣印のワダさんだ

けれど、心痛はいかばかりか。

どうしてこういうことになるのかなあ、神サマ。

思えば「九州に帰って結婚する（相手を見つける）」と言ったI子も、帰ってすぐ家が類焼し、間もなくお父さんが急病で亡くなられた。結婚せず、今は家業を彼女が主になってやっているようだ。

I子は「私が帰ったことは、家が大変な時に居合わせたし、父の死に目にも会えたのだから、幸せだった」と言っていたが、それを言うまでの、打撃に向かつて耐えているI子を思ったらかわいそうになる。

ワダさんもしっかりした子だけれど、これ以上悪い状況にならないよう、今はお母さんの手術が成功するように祈っているしかない。

○日

毎年、扇風機を買いたい、と思いつながら、デザインが気に入らない、で見送つてばかりいた。風通しの悪い部屋に、ちよつと風がほしい。

電器店をのぞいて、今年もあかなあ、と諦めていたが、去年、寮生の部屋にクーラーがついた時に取り外した扇風機があるのを思い出した。

物置に行つて、十ほどある中のよさそうなのを持つて来る。これは壁掛け式で、シンプルなものである。どうしてこれに早く気がつかなかったのだろう。工事は簡単、柱に器具をつけて、それに引っかければよい。

場所を取らず、見えなくて、頭の上から風を送つて来る。首も振る。

○日

事故の後遺症か、年のせいか、どちらか証明はできないけれど、左手が少し不自由なのは確かなので、使わずにいてもつとだめになつても困るし、と思つてまともなもの縫うことにした。

まずお友達のためのブラウスを縫つてみる。人のものを手慣らしに使うのは失礼なようではあるけれど、自分のものではごまかすから、これに限る。

やつてみたら、もたつきは少なかったが、手の心配よりも頭の心配をしなければならなかったようだ。右袖を左につけていた。やり直しの時は、右！左！と声に出して確認する。右をつけたから残りは左に決まつているわけではない。裏表逆にして、右袖を二つ作っているかも知れないのだから。そして、大声を出しては自分でその状況状態がおかしくて笑つてしまった。人が聞けば、不気味だろうなあ。

ともあれ、途中のことを抜いて合格と認定、同じ型で自分用を作る。しかしたか
をくくつて気が緩んだか、やつぱり頭の問題か、片袖の傾きを間違えていた。でもも
うやり直す気はなくて、そのまま着ている。

○日

お友達が「クモの子がかえるのを見たけど『クモの子を散らす』という言葉通りね
え」と言ったので「私も見たことある、ほんとにその通りね」と言っていた。

その後間もなく、ロビーの天井が何やら汚れている。この間掃除したばかりなのに。
よく見ると小さなクモが十センチほどの間隔で点々と巣を張っているのであった。

いつか、そう遠くない過去に『クモの子を散らす』日があったのだ。その数は二十か、
いや三十はあった。箒を逆さに天井を掃き、外で振り、を繰り返す。しかし、ロビー
は白いから見えたけれど、見えにくい所にまだどれほどいるのやら。外で見る分には
可愛いけれど、あーあ。

八月

○日

ドイツのアウグスブルクから来たアニタが入寮した。尼崎ロータリークラブの奨学生で、はじめの一か月は日本語の勉強をし、あと六か月はM社で服飾の仕事をするとのことである。

ドイツ人は大きいだろうなと思っていたが、身長は寮一番となったけれど、在寮生にも背の高いのがいてダントツではなく、私とは十センチの違いにとどまった。

ブロンドで青い目の二十三歳。それがやっぱり日本語がほとんどだめで、英語は話せるのだけれど、日本人には日本語でないとと思うのか、もう苦心惨憺の様子で言ってくれるのだが、解らない。それで私は英語で言っただけ、と言ってしまった。英語のだめな私が英語を希望するのだから皮肉な話。でもそれで少し楽になった。

一番気にかかっていた、お風呂にみんなと一緒に入ることについては、あつさり

OKで、去年のフランス人のように、単独で入れる時を見つけてやる手間が省ける。ところが、私が湯船にお湯をためながらシャワーにかかっていたら、彼女もやって来て、二人で入浴する羽目になった。もう私は慌てふためいて、洗ったのかどうか、のうちに出てしまっていた。みんなとよう入らないのは私であった。そして一度も寮生と一緒に入ったことがないのに、これも皮肉な話。

彼女は自室から浴室までの往復はバスタオルを巻いているだけで、寮生の言葉を借りると「わア、さすがガイジン」である。も一つさすがなのは、カンカン照りの屋上で日光浴することだ。この真夏の太陽の下で、肩も足もむき出しのまま、本を読んでいる。私が日焼けは心配ないのかと聞いたら「ニジガスキデス」という答が返って来た。私が英語で聞いて、彼女が日本語で答えたのは大傑作。でもタイヨウかニッコウでしょ。めったに見えない虹なんかを教えたのは誰か。

○日

毎日新聞『みんな集合』欄にこんなのがあった。

まず「京都の皆様一言おわびを……」とあり「今年の葵祭が三十年ぶりに雨天順延となったのは、わたしたち雨一家のせいなのです。ほんとにごめんなさい」という

和歌山県新宮の人のものである。

みんなで初めて京都に行ったところ、はじめは小雨で、よかったね、と言っていたがすぐザアザア降りになったとのこと。雨女、雨男はあっても、雨一家は珍しく、おかしくて、そして気の毒になる。その人達はもう慣れっこだと書いていたけれど、かつて雨女だった私は少しも慣れず、何で！と空をにらんでいたものだ。

しかし、過去形で言えるように、私は遂に雨女、嵐を呼ぶ女は返上した。今年になってから休んだ十五回のうちの割合は十四〇一●。なんだかお相撲の成績みたいだけれど、十四勝一敗なら優勝かも知れず、これは異例のことである。去年まではほとんど雨か嵐であつた。それも、きのう晴れ、あした晴れ、で、休んだ今日だけ降るのであつた。

今年降られないわけは、冗談半分に「雨女交替！」と〇子の両手を叩いて移したのが効いているからだ。〇子はそんなもくろみとは知らず、私の求めに手を出して「いやア」と手を引つこめた時はすでに遅く、私に代わつて雨女となつた。そしてそのま間もなく退寮、結婚した。来た便りに「結婚式の日もばっちり雨でした」とあつた。

〇子がかawaiiそう？ いいえ、〇子の嫁ぎ先はスキー場の民宿で、雪がないと困るのだから、〇子が行つたために雪がよく降れば商売繁昌となるかも知れない。だから〇子は雨女の方がよくて、恨みはなく、私も助かるので双方めでたしなのである。

○日

六甲植物園に行く。去年、伊吹山のお花畑を見てから、にわかに昔よく見た「アルピン・フラワー」達に会いたくなつた。でももう本格的な登山はできないので、手近な所で少しだけ見て虫をおさえよう。

しかし行つてみたら、咲く時期があるものの、沢山の高山植物が揃つていた。今、本物の高山で見られるものは五・六月に咲いてしまい、秋の花には早過ぎて、ちょうど花の数が一番少ない時であつた。けれども不満はない。コマクサが二株残つていた。三十五年ぶりである。

コマクサを南アルプスで初めて見た時、感激より神秘さにじんとした。この高い山のがれきの間の花と葉の色、どこにそれを出すものを持つているのと聞いてみたかつた。他の花々にも驚いてばかりで、私がお花畑の中に座りこんでいる写真が今も手元にある。その時山上で出会つた大阪の蝶の会の人達と仲良くなり、その後もよくついて行つた。頂上を極めるための登山ではなく、蝶を探すためのお花畑が目的なのだから楽しかつた。

思い出をかかえ、来年もまたここに来よう。四月にはミズバショウ、五月はエーデ

ルワイス。

日差しはきつくても緑の木陰は涼しく香り、神経のいやされるのがわかる。カナカナが空を貫くように鳴いて、このままここにずっといたい。そうだ、いつかこのあたりにセカンドハウスを建てよう。ファーストハウスもままならぬのに、そういう気にさせる、山は大らかであった。

九月

○日

もうほとほといやになる。やってられないわ。どうしてこうなるのか。

私が声をかけても反応のない寮生がいるから当然会話は成り立たず、ゴキゲンがよければ話ができる。それが「おばさんは氣分にムラがあつて、話のできる時とできない時がある」となるのだ。氣分にムラがあるのはそつちでしようが。

私は外国語はだめ、と、はじめから内外に大声で言つてある。外国人と話をする時は、英単語を並べ、相手が理解してくれるのを待つか、みんなと「こう言うたらどうやろ」で言つてみて通じたら「通じたア」とみんな一緒に他愛なく喜んでゐる。それが「外国人が来た時に、インテリぶつて寮生をバカにした」となるのだ。どうしてよ。インテリぶるなんて、どこを押したら出て来るのか。私の一番しないことなのに。

掃除をさぼっていたら（これは事故後遺症の回復が遅れているせいで）「おばさん

は罰掃除を自分の受け持ちの所にして、門限破りの寮生にさせて自分はいない」となった。罰は寮生が決めたことで、私はタッチしていない。言うのなら、単純に「おばさんは怠けている、悪い」と言えばよい。

私が情けないのは、それを本店総務のO氏が「寮生がこう言っているのですが」と言いに来たことである。加えて「神経質にブチブチ怒っていないで、もつとゆったりと寮生に接したらどうですか」とも言われた。私は怒ったことはない。規則を守らぬのが続いたら、規則は守りなさいとは言うけれど普通の言い方だ。

中傷をした寮生は判っている。いつか、あまりの態度の悪さにたまりかねて注意をしたら、つかつかって来た子である。それでもその後は少しよくなって、私の言ったことが効いたかと思っていたが、恨みが残っていたのだろう。もちろん、逆恨みの形で。

しかし、他に寮生は十二人いる。O氏がそのうちの一人にでも確かめさえしたら、事実反していることは判ったはずだ。どうひねくれて考えたところで、そこまでのことは出るはずがないという自信は私にある。私はムラなく平等に声をかけているし、インテリぶつてもいないし、寮生をバカにした覚えはないし、罰も決めていない。

何も知らない人が私の顔を見て「冷たそうな人だ」と思うのなら仕方ない。私はそう見えるらしいから。でも違う。ついでに「お酒を一升でも飲めそう」とよく言われ

るけれど、私はビールを猪口一杯飲んだだけで頭がガンガン、胸がドキドキして苦しくなる。しかし一見そう見えても一緒にいれば事実が証明する。O氏とも何回か会ったことがあるのに、一寮生の言うことで、さもありなん、と思われたとしたら情けない。人事に関する人は、人を見る目が特に優れているのだらうと思っていたけれど、これは私が浅はかだったらしい。

しばらく氣力をなくし、呆然としていたが、寮会を開いて、O氏から言われたことを話し、心外なことだけれど、掃除をさぼったのは確かだから、ごめんなさいと謝った。「そんなこと思いもしなかった」「お婆さんが、みんながそう思っていると思われるのは困る」「O氏がおかしいわ」と言う声が出て、大勢は私に同情的であった。でも私の気持ちはすつきりしていない。言った寮生を探し出して糾明したわけでなし、言われたことは残っている。言われたことのない人には解らないだらうけれど、私は谷底につき落とされて動けない状態にある。

寮会は、罰掃除はもう場所を変えてと言って私は座をはずしたが、一時間ほどわいわい言っていて決まったのは、罰の他に二か月に一度の割でお婆さんも一緒に一杯やる会をもち、カラオケをやる、ということであった。何かあつたら「飲もか」となる彼女達。

また、思いもかけない展開に私は困り果てている。お酒もカラオケも苦手の私。これに参加しなかったら、また「冷たい」「……ぶっている」となるのだろうか。

十月

プツン。これはかなり前の流行語だけれどよくできている。今の私のやる気の切れた状態にぴったり当てはまる。事の起こった直後はまだ元気があって、どうしてやるうか、と思っていたが、もうそれもなくなった。

また総務の人が「行く」と連絡してきたので（前とは別の人）まだ何かあるのか、誰か他に雇いたい人がいて、私が辞めると言い出すのを待っているなら、そんな回りとどいことをせず、はつきりと言って下さい、と言ってやろう、と待ち構えていたら、電気部を連れて、寮の手入れ箇所の検査ということであった。

それで私から「O氏から注意をされたけれど、私には身に覚えのないことで……」と言いかけたら、知っておられて「『一方的な訴えで言いに行くな』と言うんです」と。何やらもうガツクリ。

つまりはO氏の勇み足のようであつたけれど、それで済むのかと言いたかった。私

の人格にもかかわるようなことをわざわざ言いに来て、私が抗議しなければ、それで終らせるつもりなのか。

しかし、食らいつくほどの相手ではないから（会社そのものも）もう放っておくことにした。そして仕事は精一杯にはやっていない。今のところ、やる気がどこかへさ迷い出てしまっているからでもあるけれど、これで文句を言われても材料はあるのだから、谷底に落ちなくてもすむだろうという自衛策とも言える。

中傷にもめげず、劣悪な労働条件にも耐えて、黙々とひたすら職務を全うするとう、サウイウヒトニワタシハナレナイ。

十二月

○日

C 総務のK氏が来られた。この人は寮関係の元締めで、私のしめつけ係でもある人。この前、あまりのしんどさに、せめて十日に一度休みたい、と言ったら「休んでもいいが、代わりに来てくれる人を見つけないさい」と言われ、そう簡単に適任者が見つかるわけもなし、つまりは休めなくて過ぎていたのだった。

来られた理由は「寮の雰囲気を変えようと思って……」私は先日の中傷以来いじけているから「それは私のことでしょうか」と言う。K氏はきょとんとしておられる。違つたらしい。私「いえ、Oさんから身に覚えのないことでご注意を受けましたから、またそれかと思ひまして」K氏「そんなことは聞いてないよ、何を言うんだね」そして「Oさんの言ったことは気にせんでよろしい」（気にせんでよろしいと言われたつて、私はもうさんざん気にしてしまっているから遅いワ）

で、雰囲気とは文字通りのもので、食堂の一隅にソファを置き、鉢植えも置いて、やわらかい感じにしたい、とのことだった。

寮生が植物を見て喜ぶとも思えないし、水やり掃除など私の手間がふえるだけだと思っけれど、これこそ本気で気にすることはないのだ。こちらからこうしてほしいと言つてもなかなかしてもらえぬ代わり、こうしようと言われてもすぐにはならないのだから。

そしてこのプランは別のことでおじゃんになった。急に社内の仕事の分担が變つて、K氏は寮とは関係がなくなり、H総務のF氏に移つたのである。

私は、あの、こちこちの、しめつけのK氏の栄転を、毎年の異動期には心から祈つていたのだけれど、こんな形で離れることになろうとは。

急に目の上が開けた。それとうまいぐあいに、とことん態度の悪い寮生二人が相次いで退寮することになった。このうちの一人は中傷をした子である。あんなうそを並べて、あとの自分のことは考えなかったのか、と不思議だったけれど、これで解つた。やめる前だから言えたのだろう。

とりあえずお赤飯を炊き、代役なし、気がねなしの休みをとろう、と思つている。

一月

私のお正月は例によって寮の留守番を兼ねて掃除に明け暮れ、お正月気分も、気持ちを新しくする状態にもなかったけれど、世間の鏡開きの日、念願のコーラス団に入れたもらった。

練習場は自転車で五分ほどの所で、メンバーは中年以上四十人くらい。中には四年代生きてると言う人あり、ママさんコーラスとはとても言えない。しかし歌う曲はかなり高度のもので、先生の「わたしはうれしがりで、新しい曲が好きやから」の方針のようだ。

はじめ「今日は見学して、よかつたら入りなさい」と言われたけれど、私はもう長い間チャンスをねらっていたのだから「ぜひ今日から入れてください」と椅子を並べるのも手伝った。

ところが「新しい人は一番前！」と言われてギョッ。音名で歌うのなんか久しくやつ

てないから、かなんなアと思いながら前へ座って、でもハ調とニ調だったので助かった。

先生はきれいなアルトの活発な人で、私が「少々神経がイカレてる」と言ったら「そんな人にはうってつけの所やから、休まずにいらっしゃい」と言われ、コーヒを飲みにも誘ってくださったけれど、私は抜けて出て来ているから走って帰った。

出た時に限ってなんかある。この時もぼっちり本社のF氏から電話がかかっていたらしく、午後になって「行くつもりだったけどあしたにします」と言ってこられた。

F氏が来られた時に私は「毎週一回コーラスに行きます」と言った。「行きたいのですが」「行かせてください」なんて言っていたら今まで通りになるから、強気で言うてみた。ところがF氏は前のコチコチ氏とは違って「出てはいけないと言うのはおかしい」と言う人で、それだけで私の神経は元に戻りそう。コーラスの先生は「自閉症でも治る」と言われたけれど、私のはいわば「他閉症」なのだから出してもらえれば簡単に治るだろう。

年号が変わり、直属の上司が変わり、私はおおっぴらに歌えるようになり、ちよつとすつとして、気持ちを変えてできるだけがんばろうと思えるようになった。



五月山公園の眼下を流れる猪名川。遠景は六甲山系（1985年。→p.174）



寮の食堂で歓送パーティ（1990年）